

本願寺宣如の消息宛所に、『加州石川郡サイ川谷三村廿五日講中』とあるが如きはこれで、その三村といふは辰巳・平澤・水淵をさしたものである。

サイガハノコロ 犀川の木呂 木呂は新材に供する丸木で、犀川では上流倉谷附近からそれを伐出し、川流しにして金澤へ出した。之は寛永以前より伐出されたが、享保頃一旦伐り盡くし、其の後追々山林繁茂してまた伐出した。明治以後はこの事が無い。

サイガハハシバマチ 犀川橋場町 金澤犀川橋爪を昔は橋場町といひ、犀川附近で最も繁昌する商業地であつた。變異記に享保十八年四月廿六日傳馬町邊養智院附近の小家から出火、五枚町・橋場町類焼といふものは是であり、公稱は河南町であつたらう。

サイガハバ 犀川馬場 金澤犀川の右岸法船寺の附近に在つて、一名法船寺馬場ともいうた。延長百七十間、幅五間半、土居の高さ九尺のものであつたが、その起原に就いては詳かでない。

サイガハバカタハラマチ 犀川馬場片原町 金澤の舊町名。元祿九年地子町肝煎裁許附に、犀川馬場片原町が見える。後にこの町名は絶えたが、犀川馬場の片側にある町家と呼んだのであらう。

サイカロク 採花録 六冊。苗圃渡邊喜左衛門の著。前田慶寧の親翰、徳川將軍その他武家の逸話類を集めたものである。

サイガンジ 西岸寺 河北郡太田に在つて、眞宗東派に屬する。初は同郡荒屋に居た。
サイガンジ 西岸寺 羽咋郡相神に在つて、眞宗東派に屬する。初め給分に居たこともあ

るといふ。

サイキカツセン 犀來合戦 ↓サイスコカッセン 犀來合戦。

サイキノハナ 犀木の端 ↓サイスコカッセン 犀來合戦。

サイキユウジ 西休寺 鹿島郡七尾に在つて、眞宗東派に屬する。山號は白藤山。初め同郡瀬風に居たといふ。

サイキヨ 裁許 才許とも書く。藩政時代に、一定の身分のもの又は事務を統轄する主任をいふのであるが、奉行又は頭よりも輕易な場合に用ひられたやうである。御射手裁許、御異風裁許、興力裁許、本吉湊裁許、新庄金山裁許の類である。

サイキヨウジ 西教寺、羽咋郡一宮に在つて眞宗東派に屬する。能登名跡志に、『一宮宿村の一向坊に聖徳太子の靈像あり。色々奇瑞有。是は浦村の寺々崎といふより掘出せしといへり。』と記する。

サイキヨウジ 西教寺 羽咋郡倉垣に在つて、眞宗西派に屬する。

サイキヨウジ 西慶寺 鳳至郡四位に在つて、眞宗東派に屬する。

サイキン 在勤 諸士にして既に家を襲ぎ、若しくは別に祿を受け、藩に勤仕するものをいひ、無息に對する語である。

サイクサゴウ 三枝郷 江沼郡の古郷名で、和名抄に『三枝、佐伊久佐』とあるものであるが、今廢して傳はらない。

サイクサシヨウジュン 三枝昇純 鹿島郡高田眞宗東派宗貞寺の僧。號は知足。前代徹中子なきを以て入りて後を繼ぎ、高倉學寮に學んで寮司に任せられ、後僧部に補せられた。

昭和九年八月十二歳を以て寂。法蓋龍勝院。

サイクサテツチユウ 三枝徹中 鹿島郡高田眞宗東派宗貞寺の僧。初め深諳といひ、高倉學寮に學んで寮司に任せられ、説教を以て全國に周遊した。明治三十二年十二月七十四歳を以て寂。法蓋開正院。

サイクシヨ 細工所 御細工所は初め金澤城内に在つて、岡島備中一吉の舊邸をそのままに用ひたものであつた。然るに寶曆九年の災に罹つたので、假屋を堂形御厩の附近に造つて之に轉じた。

サイクフギヨウ 細工奉行 初め慶長・元和の頃御馬廻組井上權左衛門之を勤め、正保三年に歿した。當時御武具方、御細工方、御弓方、御鐵炮方の四職に分かれ、御細工奉行が四職を總裁した。この後當職の姓名見えず。

慶安元年御馬廻玉木彦左衛門御細工御用を命ぜられ、爾後平士役として連綿したが、貞享四年三月御馬廻吉田七左衛門・興力俣野六兵衛の二人が免せられて、伊藤甚右衛門・關屋市左衛門政知・大河原八郎左衛門長博に奉行を命ぜられ、役料百石を賜はり、頭分の職となり、享保五年西村彦兵衛政泰の死後は二人となつた。

サイクモノ 細工者 前田利家の代高橋八左衛門が御歩組で小刀細工を勤め、御細工者となつたといふ。利長時代には北島儀左衛門當職となり、利常時代に至つては不島文平・水谷金右衛門・興津平助が之を勤めた。綱紀の代天和貞享に至つて全く後世の規模になつたとと思はれ、元祿年間には人高五十人許、小頭四人で組を分け支配したが、其の後組分を止めた。御細工者は御細工奉行に屬し、細工

所にあつて、時繪細工・漆細工・紙細工・金具細工・繪細工・針細工・具足細工・葦物細工・小刀細工・象眼細工・刀鍛冶細工・研物細工・鏝細工・茜染細工・春田細工・興細工・鐵炮金具細工・鞍打細工・大工細工・竹細工・御能作物掃物等に從事した。藝の巧拙を以て祿高を定められ、上五十俵、中四十俵、下三十俵で、子弟を召抱へる時は初め五人扶持とし、後三十俵又は三十五俵に引直された。

サイクモノコガシラ 細工者小頭 元祿元年二月初めて出口彌助・牧又七郎・山本治兵衛三人に御細工者小頭を命ぜられ、役料知二十石を興へられた。同三年十一月廿二日中村仁右衛門・篠田權兵衛・竹内五左衛門、御奥小將附御歩横目から命ぜられ、その後人数四人となり、切米の者は皆新知八十石を賜ひ、知行でもそれ以下の者には不足を補はれて、何れも御歩横目から命ぜられたが、延享二年閏十二月山本平八の時から御細工者の内より命ぜられて、新知・役料共前の如く興へられ、その人員を三名とした。然るに天明二年六月高橋小兵衛の任ぜられた時から、新知のみ興へ、役料知は御歩小頭の如く賜はらぬことになつた。

サイクモノコガシラナミ 細工者小頭並 御細工者小頭並は、前田治脩の代天明八年十月十一日始めて勝木市郎右衛門に命ぜられ、新知八十石を賜はつたのが起原である。役料知はない。享和元年十月市郎右衛門老年に及んだためその役を免ぜられ、子市丞之に代つた。其の後文政元年七月十日武田秀平が此の並に召出され、十五人扶持を興へられた。